ダイジェストは、『たまきはる』本文の文章60ページの中から、
5ページを抜粋しています。

# たまきはる

神藏美子

LITTLEMORE

「神さまは、いるの？」と、なぎちゃんに聞かれた。
「うん、神さまは、いるよ」
「わたしのこと見ているの？」
「うん、見ているよ」
「『神さまは、感謝するものに、より多くの恵みを与える』って聖書に書いてあるよ」

なぎちゃんの病室に入るのが怖かった。妖精みたいななぎちゃんが、ビルから落ちて大ケガを負った。瀕死の重傷だった。

アゴの骨を全部つなぎ合わせて、腕や脚に金属をはめこむような大手術をくぐりぬけて、数カ月病院で過ごしたなぎちゃんが、もとどおりのかわいい顔で、なんにも傷口が見えなかったから安心した。

前日に、病院を抜け出し、タクシーに乗って広尾まで、まつ毛エクステしに行ってきたというから驚ろいた。確かにまつ毛は長かった。数カ月の入院で、ロングヘアになった髪は、病室できれいにダークブラウンに染めていた。なぎちゃんの細い器用な手や、指がそこまで、回復していた。だけれど、やっぱり長期入院の病室は空気が重かった。

なんで、「神さまは、いるの?」って会話がはじまったんだっけ?

今はもう、なぎちゃんに聞くことはできないのか。

なぎちゃんのお見舞いに行って、なんとか、なぎちゃんに大切なことを、一番大事なことを言わなければ、とおもったら「神さまは感謝するものに、より多くの恵みを与える、って聖書に書いてある」と言ったけれど、自分はいったい神さまに感謝しているのだろうか? いつもじゃなくても、あふれるような感謝をもったことがあるのか? 神を讃美するってどういうことなんだろう。神さまに感謝できないから、この『たまきはる』が、なかなか出来ないんじゃないだろうか。

何年も、何年も、『たまきはる』を創るという、牢獄にいるみたいだ。

おおげさな。なんて、おおげさな。

自分のこととなると、すぐピーピーこれだ!

いや、そもそも神さまのことを、人に説くほど、

自分が神さまにむすびついているのだろうか?

わからないけど、聖書には、「神(かみ)は愛(あい)である」って書いてある。

「生きていたくない」ってなぎちゃんが言った。
　ふたりで、三軒茶屋のなぎちゃんのマンションのすぐ近くの２４６沿いのカフェにいた時。わたしは、夜中ずっと環七にあるスタジオで、銀杏ＢＯＹＺ聴きながら『たまきはる』の写真をえらんでいた。朝がきて、おもいついてなぎちゃんに「朝ごはんいっしょに食べようか」って、でんわした。スタジオで、ずっと姿勢の悪いままいたせいか、もうすぐ２４６に出るところの路地で、足首がぐきっとなって、捻挫した。三十分くらい動けなかった。幼稚園に登園する子供たちがたくさん通って、屈んだ中腰のへんな姿勢で、かたまっているわたしを不審そうに見ていた。バチが当たったなーって、思った。銀杏ＢＯＹＺのミネタくんのこと考えていたから、バチが当たったんだ。やっとこさ、びっこひいてカフェについたけど、なぎちゃんは、わたしより、もっと遅刻魔だから、まだ来ていなかった。
「生きていたくない」って言いながら、なぎちゃんが、その日、スキな人に会うのに、スカートにするかジーンズにするか、いっしょに考えた。なぎちゃんが服を選ぶためにマンションから持ってきたスカートは、ミュウミュウの、紺色のビニールみたいなスカート。同じスカートをわたしも持っているから、あのスカート見るとなぎちゃん思い出す。「やっぱり、デートはスカートじゃない？」ってことになって、上は、ノーブラでニットを着ることにしたね。
　なぎちゃんは、華々しくアートディレクターとして活躍して、コカ・コーラのワールドワイドのＣＭもディレクションしていた。コカ・コーラのＣＭは、アフリカのどこかの国で、体育館のようなおおきなセットをつくって撮影されたと聞いた。現地の数百人のモデルの人たちがなかなか言うことをきいてくれなくて、なぎちゃんは、体調をくずしていたなかで、ゲロ袋を片手に、必死に指揮をとって、撮影をすすめたのだと、ヘアメイクを担当していた、ナツさんに聞いたことがある。
　ギンザ・グラフィック・ギャラリーで展覧会を開いたハンパンダの作品は、たくさん売れて、パリの個展も大成功だった。Partizanという有名なエージェントに所属し、世界中のミュージシャンのＰＶも制作していたのに、なぎちゃんは、憂鬱のただなかにいた。好きな人もいて、その恋が困難だったにしても、あんなに夢中だったのに。「生きていたくない」って言葉にでるような、不安定な鬱状態が、なぎちゃんを覆っていた。なぎちゃんは、「現実がイヤ」って言っていた。
「降りてくる、降りてくる、絶対に降りてくる、って信じるの」
　って、なぎちゃんは、作品のアイデイアを考える時のこと、インスピレーションを受ける時のことを言っていた。でも、次々に作品を創っていくことは、苦悩も通り越して、激痛みたいなものだったのか。

　アダムとエバは、神さまが食べてはいけないと言った、善悪を知るの樹の実を食べて、そして人間に自我が生まれたのか。人間には自我があるから「生きていたくない」なんて気持ちにもなるのか？　それに、作品を創っていくことは、創りつづけることは、自我がどんどん大きくなることだから、そのことは、苦しみさえ生むのだろうか？
　いや、でも、そんなことじゃなくて、なぎちゃんは、親密を求めていたんじゃないかと思う。だれかと親密になることを。

「人間は『親密』がないと生きてゆけないんだ」と銀杏ＢＯＹＺのライブを観て思った。銀杏ＢＯＹＺのライブは、銀杏ＢＯＹＺと、銀杏ＢＯＹＺを必死に求めてきたお客さんとで出来ている。唾と汗だくのライブのなかで、みんなそこでしか得られない親密に触れる。ウチのねず美ちゃん（猫）だって、子どもを産んで、それで子猫たちとヌクヌク、ペロペロしながら自分の家族の親密を作っていたけれど、そういう猫でも当たり前にはぐくんでいる親密が、いま、人間のほうがしっかり受けられなくなっちゃったのか。いままで当たり前にお母さんや、家族や、友達や、地域社会とかからもらっていた親密が、いまは希薄になってしまったんだ。子供の頃に、じいちゃんと、ばあちゃんの間に寝ていたというミネタくんは、身を切るようにして、音楽にのせてみんなに親密を分け与えようとしているのか。

「銀杏ＢＯＹＺ　世界ツアー２００５」の、盛岡、秋田、酒田の三カ所を、『ギンナン・ショック！』の取材撮影でついてまわらせてもらった。盛岡の、百人くらいしか入らない小さなライブハウスの熱狂は、ライブが始まる前から、道路脇にずらりと並んだお客さんから、たちのぼっていた。ファンの若い子たちは、真剣そのもので、ビデオカメラを持ってインタビューさせてもらうと、「銀杏ＢＯＹＺありがとう」「銀杏ＢＯＹＺに救われている」と、涙をながさんばかりに熱く「銀杏が、ミネタが、自分にとって何であるか」を語ってくれた。感謝の言葉がしきりだった。わたしにも、銀杏ＢＯＹＺを聞いて、長い鬱のトンネルから抜けられるような、気持ちがあったので、インタビューしながらこちらも胸がつまった。ライブが楽しみ、ワクワクするなんてことを通り越して、おおげさでなく、銀杏ＢＯＹＺのライブに生きることの糧を求めて来る子たちがいっぱいだった。真剣そのものだった。どうしてもチケットをとれなかった人たちが何人も「チケット売ってください」と書いたボードを持って、ずっと路上で、風に吹かれて立ち続けていた。

ツアーが終わった翌年三月、川崎の「CLUB CITTA'」でおこなわれた、様々なロックバンドの登場する「SET YOU FREE SUMMER FESTA」のライブで、ミネタくんがＭＣで叫んでいた。「俺は、ロックンロールをやりにきたんじゃない。俺らがやりたいのは、ロックンロールなんかじゃない！　俺がやりたいのは、そんなカンタンなもんじゃない！　俺は、あなたたち、一人ひとりの、生命（いのち）をみつけに来たんだ」

その夜、最後のバンド、銀杏ＢＯＹＺのライブがはじまると、ステージには誰もいなかった。ライトの当たったカラッポのステージをしばらく見ていたら、ミネタくんが、会場をうめつくす、お客さんの海のなかを、ダイブしながらステージまで、人の海のなかを泳いで、舞台に上がって来た。ギターを持つとスポットライトのなかで、「人間」をソロで絶叫して、ライブが始まった。場内は一変した。ロックンロールのライブではなく、救いを求めて集まっている人たちの集会のように一変した。「俺は、あなたたち、一人ひとりの、生命（いのち）をみつけに来たんだ」

わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。

（ヨハネ　十五章四節　新共同訳）

スエイが、手を、そっとパパの頭に触れた。スエイはパパと家族になったのだ。
自分の父親が亡くなった時、涙がでなかったというスエイは、パパが亡くなって泣いた。

パパは、ジジィになって、ごくおだやかな日常を送っていたけれど、最後の一、二カ月は、ダッシュして、駆け抜けていったようにわたしには見える。年末には、「オレのほうが疲れてきちゃったよ」と、だんだん身体がキツイようだったけど、きちんと買い物したり、家事をしたり、出来ることは全部やって、グチも言わないで淡々としていた。

亡くなる二日前に、渋谷からバスで家へもどるのに、田園都市線の事故があって道路が渋滞し、一時間以上も立ったままでバスに揺られて帰宅した。「大変だったでしょう」と言ったら、「いい社会ベンキョウだよ」とケロッとしていた。

だけど、パパがスーと少し透明になってゆくみたいに、死が近づいていることをなんとなく感じていた。そういうことは、不思議だ。パパが、パパのままで、だんだん仏様のようになっていくのか？　でも、パパは勘のいい人だったから、自分のことはもっと、わかっていたんじゃないだろうか。

亡くなる前年の秋彼岸に、お兄ちゃんの家族と、パパとママとわたしで雑司ヶ谷墓地へ墓まいりに出かけたとき、パパは、背広を着て黒いネクタイをしめていた。堅苦しいことは嫌いだったのに、まるで今生で最後の墓まいりとわかっていたかのように、きちんと背広を着て出かけた。

年末には、医者嫌いのパパが唯一好きだった美人のお医者さん、伴野先生のところへ、数年ぶりに顔を出していた。「伴野先生との付き合いも、四半世紀になるよ」と帰ってからふりかえっていた。四半世紀という言葉が耳に残った。

年明けには、高齢で、親戚の集まる席にも出かけなくなっていた一番上の姉、フジイの伯母さんを江戸川橋まで、ふいに訪ねて行ったそうだ。

いつだったか、スエイがこの『たまきはる』が六年以上もかかって、なかなか出来ないでいたわたしに、「『たまきはる』は、おとうさんの死で終わる気がする」と、言ったことがあった。そういうことは、不思議だ。そのとおりになってしまうものだ。

パパはわたしが、あたらしい写真集を作っているのを知って「もう、半分くらいは出来たの？」なんて心配してくれていたけれど、パパが『たまきはる』に入ってしまった。

たまきはるは、生命（いのち）の枕詞だ。

パパは、霊となってわたしを助けてくれようとしたのか？